

# 大学における英語の授業についての一考察

林 響子

了徳寺大学・教養部

## 要旨

近年多くの高等教育機関で学生の学力の低下が問題となっている。英語力においても例外ではなく、中学・高校で学習したはずの内容が身につけていない学生がいることはめずらしくない。本稿ではある大学における英語の授業の様子を紹介し、学生の学力に合わせてどのような授業を行っているかを記述した。この授業の例からも多くの学生が語彙力、第5文型や依頼文などの基本的な文法・表現力を身につけていないことが示され、そのため中学・高校、ひいては小学校からの英語教育を見直すこと、併せて国語の力をつけることも重要であることを示した。

キーワード：英語の授業，大学生，英語力，日本語力

## A university English class observation report

Kyoko Hayashi

Department of Liberal Arts, Ryotokuji University

## Abstract

Many higher education institutions are having issues with the decline of the academic performance of university students. Their English proficiency has gotten worse as well, and it is now common to find many students who do not understand the basic rules of English, which they had learned in junior high school or high school. In this study, an English class for university students was described through observation. It was observed that many of the students had not acquired basic knowledge of English from the description of the class. Therefore, it is suggested that we reconsider the English-language education in elementary school, junior high school, and high school. It is also proposed that we should enrich the Japanese-language education of students.

Keywords: English class, university student, English proficiency, proficiency in Japanese

## I. はじめに

近年ますます国際化が進む中、英語がいっそう重要になってきていることは言うまでもない。日本においても2020年から小学校での英語教育が必修になるなど、まだまだ不十分ではあるが国を挙げて日本人の英語力を伸ばそうとする姿勢がうかがえる。しかし、英語教育の指針を策定する機関は、高等教育機関における英語教育の現状を理解しているのだろうか。

筆者はこれまで10年以上にわたって様々な高等教育機関で英語の授業を行ってきたが、ほとんどの機関で、学生は中学・高校の6年間でいったい何を学んできたのかと首をかしげたくなる経験をしてきた。be動詞と一般動詞の区別がつかない学生がある程度存在するのはめずらしいことではなく、日本語の「動詞」

や「形容詞」もどのようなものかが理解できていない者を多数見てきた。そのため、このような学生が多く存在する高等教育機関においても、英語の授業は中学・高校と変わらない水準とせざるを得ない。

本稿では、大学での英語の授業の一コマを紹介し、実際に授業でどのような内容を扱っているのか、学生はどのような応答をするのかを記述し、今後の中学・高校、ひいては小学校からの英語教育を再考するきっかけになるような示唆をしたい。

## II. 大学における英語の授業の一例

### 1. 対象クラスと学生

本稿で紹介する授業は、私立大学の1クラス20名の学生を対象としたものである。この大学では入学時に英語プレテストを行い、その結果によって学生を少人数のクラスに分けているが、今回の対象のクラスは学科を5クラスに分けた時の上位から3番目、すなわち中位クラスにあたる。このクラスの学生は非常に物静かでおとなしく、積極的に挙手や発言をする学生はあまりいない。

### 2. 使用教科書

今回の授業の科目名は「総合英語I」で、医療英語を学ぶ1年生対象の前期開講科目である。教科書は『Medical English Clinic－やさしい医療英語－』を使用し、主に医療現場で使用される英語を学んでいく。この教科書はUnitごとに様々なトピックを扱い、1つのUnitは新出単語・Listening Activity (リスニング)・Reading Activity (リーディング)・Writing Activity (簡単な英作文)・For Your Information (医療に関する単語)・Supplement (医療に関するこぼれ話) から構成されている。授業ではあまり学生になじみのないトピックを省くことはあるが、ほぼ順番通りすべてのセクションを扱っている。

### 3. 実際の授業の様子

#### 1) 全体の流れ

まず、今回の授業で扱った教科書のページを以下に示す。

NATURAL SLOW  
 **10**  **11**

## Listening Activity

会話を聞いて、空欄に英語を書き入れなさい。ただし、最初はテキストを見ないで聞きましょう。

Nurse: What ① \_\_\_\_\_ the problem?

Patient: I have a migraine.

Nurse: Can you ② \_\_\_\_\_ the pain?

Patient: It is a ③ \_\_\_\_\_.

Nurse: Is it continuous or does it ④ \_\_\_\_\_?

Patient: It is continuous. I can't sleep because of the pain.

Nurse: Can you show me where the pain is?

Patient: Around here. ⑤ \_\_\_\_\_ for two days now. I can't stand it.

Nurse: Does anything ⑥ \_\_\_\_\_?

Patient: Yes, I feel awful when I take a bath.

Nurse: The doctor will see you soon.

なお、①～⑥の解答は以下の通りである。

- ① seems to be
- ② describe
- ③ throbbing pain
- ④ come and go
- ⑤ I've had it
- ⑥ make it worse

今回は、Unit 4 Pain ProblemsのListening Activityを扱った。この教科書に付属しているCDには、ノーマルスピードとスロースピードの2種類の音声が入録されており、Listeningの際には最初にノーマルスピードの音声を聴かせ、次にスロースピードの音声を聴かせている。この1つ前のページにはVocabulary Studyがあり、このUnitで使われている新出単語が示されているので、まずはその単語の発音を音読することにより復習し、それからListeningを行った。2種類の音声を聴いた後、この会話文の和訳をしながら答え合わせを行った。

## 2) 答え合わせと和訳

ここで一人の学生を指名し、聴き取った単語を答えてもらい、和訳をしてもらった。この学生は、このクラスの中では比較的英語が得意な方であり、他の学生が困っていると答えを教えてくれる学生の一人である。

### (1) リスニングの答え合わせ

a. What ①seems to be the problem?

①に入るものを尋ねると、指名した学生はseemsが聴き取れていなかった。そのため他の学生に聴き取れたかどうか尋ねたところ、一人だけ挙手をして答えてくれた。

b. Can you ②describe the pain?

②のdescribeは、今回の授業の数週間前に別のページで辞書を引いて確認した語である。指名した学生はきちんと答えられたが、他の多くの学生は答えを修正していたので、聴き取れていた者は多くなかったようである。

c. It is a ③throbbing pain.

Listeningを行う前に復習した新出単語の中に③のthrobbing painが含まれていたため、CDを流した時にほとんどの学生が新出単語のページを見て綴りを書き込んでいた。先ほど発音した単語であることに気づいて聴きとれた学生が多かったようである。

d. Is it continuous or does it ④come and go?

come and goはスロースピードでかなりはっきりと発音されていたので、ほとんどの学生が聴き取れたようであった。

e. ⑤I've had it for two days now.

ここが最も難しいようであった。指名した学生は全く分からなかったと答えたが、なんとかhadを聴きとった他の学生が手を挙げて答えてくれた。その後、Iが聴こえたという学生がいたので、hadの前の答えはIとその後ろに続く単語の短縮形であるとヒントを出し、その部分のみ何度も繰り返し聞かせてようやくI'veを答える学生が出てきた。その後また何度も繰り返して聞かせて、itを聴き取れた学生が答えを言ってくれた。

確かにhad itはつながって発音されて「ハディット」のように聞こえるので難しいだろう。一方、「've」の部分はほとんど音として聞こえないが、hadが先に分かり、Iとその後に続く単語の短縮形だとすれば音を聴かずとも文法と文脈を考えればI'veだとわかるはずだが、このクラスの学生にはそれを理解することが難しいようであった。

f. Does anything ⑥make it worse?

指名した学生はmake itを聴きとることはできた。他の学生に3つ目の単語が聴き取れたかどうか尋ねたところ、一人だけ手を挙げてworseを答えてくれた。

## (2) 和訳

授業ではすべての文を和訳したが、学生の応答に特に問題があった文のみ以下に記載する。

a. What seems to be the problem?

指名した学生この文の和訳をしてもらったが、まずseemの意味が分からなかったので全員で辞書を引いた。seemは通常高校までに習う単語であるが、これまでも答えられた学生はほぼいなかった。意味を確認した後、文全体を訳してもらったが、指名した学生は大体言っていることが分かったようで、「どんな問題がありそうですか?」と答えた。今回の1つ前のUnitでWhat has brought you here today?という疑問文が出てきたが、ほとんどの学生が主語のWhatを「何を」と訳し、正しく訳出することができなかった。この時にWhatが主語になる疑問文を説明したが、今回の疑問文も同じ形であることが理解できているようには思われなかった。疑問詞が主語になる疑問文も中学で学習するはずだが、これも身につけていない学生がある程度いた。

b. Can you show me where the pain is?

この文を訳してもらうと、学生は「どこが痛いかに私に教えることはできますか?」と答えた。Can you ~?をいつも「できますか?」と訳し、依頼を表すことを知らない学生が多いため、毎年Can you ~?は「～していただけませんか?」と訳すことも多いと説明しなければならない。

c. I've had it for two days now.

指名した学生はhad itの具体的な内容は理解しており、2日間痛みが続いているということは理解できていた。しかし、現在完了形を理解していない学生が多いため、毎年ここで復習を行っている。have+過去分詞という形は何となく覚えているものの、この完了形が表す意味を覚えている学生がほとんどいない。

クラス全員に現在完了形の基本的な意味を3つ言えるかどうか尋ねても、だれも手を挙げなかった。指名した学生に尋ねると、「継続」の意味は答えることができたが、そのほかの意味は答えられなかった。しかし、別の学生が「経験」と「完了」を答えることができた。このような状況であるため、「継続」・「経験」・「完了」それぞれの意味が表れる例文を1つずつ黒板に書き、説明した。現在完了の基本も中学で学習しているはずだが、ここでもまた中学で学ぶ内容を説明しなければならなかった。

d. I can't stand it.

指名した学生に訳してもらおうと、「立つことができません」と答えた。この教科書を使用して7年目になるが、今までどのクラスにおいてもこの文を正しく訳すことができた学生はいなかった。standを「立つ」と訳すということは、その後ろのitの存在を全く考えていないのであろう。つまり、他動詞と自動詞の区別を理解していないか、あるいはそもそも他動詞と自動詞自体を知らないかもしれない。そのためここで動詞には自動詞と他動詞があることを説明した。これまでに自動詞と他動詞について学校で習ったことがあるかどうか全員に聞いたが、手を挙げた学生は数人であった。中学・高校で全く教えていないとは考えにくく、学生が習ったことを忘れてしまっているのであろう。もちろん、standに関しては全員に辞書を引かせ、ここでの意味を確認した。

e. Does anything make it worse?

リスニングの解答としてmake it worseを板書した後、worseの原級を尋ねても学生がわからなかったため、辞書で調べさせた。その後badの比較級worseと最上級worstを説明した。最上級のworstが普段カタカナで使っている「ワースト1位」という言葉の「ワースト」だと説明すると、なるほどとうなずく学生が何人もいた。

次に、ここでのmakeの意味が分かるかどうかクラス全員に尋ねたが、誰も答えられなかった。そのためmake+O+Cの説明をしなければならなかった。makeの使い方を説明した後、itが具体的に何を指すのかを考えさせ、先に辞書で調べたworseの意味と合わせてようやく「痛みをよりひどくする」という訳ができた。その後、anythingも辞書を引かせて意味を確認し、「何かが痛みをよりひどくしますか？」という直訳にたどり着いた。さらにそこから適切な日本語に言い換えるように指示をし、最終的に「どうしたら痛みがひどくなりますか？」という訳が導き出された。

比較級、最上級やmake+O+Cも中学で学習しているはずだが、これらも身につけていなかった。さらに、直訳した日本語が不自然であってもそのままにしておく学生が圧倒的に多く、訳はしたものの結局どのようなことを言っているのかが理解できていないことが多い。授業では、まずは文法を理解して正しい訳をすること、その上で結局どのようなことを言っているのかを考えることという2つの段階を経なければならないことを常に意識させている。

### Ⅲ. 問題点のまとめ

#### 1. 語彙力について

高校までに学んでいるはずのdescribe, anything, worse, awfulなどを辞書で確認しなければならないため、学生の語彙力は不十分であると言える。特に、先に述べたworseを最上級とともに説明しなければな

らない点については相当な懸念を覚える。今回指名したのは多少基礎力が身につけていた学生であったため、ここに述べていない文に関してはスムーズに訳すことができたが、他のクラスではshowを「見る」と訳したり、whereを「いつ」と訳す学生もいた。

## 2. 文法・表現力について

先に述べたように、Can you～?を常に「～できますか?」と訳す学生が多いため、辞書を引いて依頼表現の例文を確認させなければならない。Can you～?を使った依頼表現は日常会話で非常によく使われるため、コミュニケーション重視となってきたはずであろう小学校からの授業で学習していないはずがない。基礎的なコミュニケーション表現が身につけていないとなると、いったい何のためにコミュニケーション重視の授業にシフトしたのであるのか。

また、中学や高校の授業で何度も目にしているはずの現在完了形を理解できていないことにも懸念を抱く。今後も授業では医療英語を学ぶと同時に基礎文法の復習もしっかり行わなければならない。

## 3. 日本語力について

最初のWhat seems to be the problem?を「何が問題であるように思われますか?」と何とか直訳しても、結局何が言いたいのかを理解できない学生が多い。先に述べたDoes anything make it worse?も同じく、まずは苦勞して直訳が分かって、その後言わんとすることを正しく理解して自然な日本語に訳すことができない。この点から考えると、問題であるのは英語力だけでなく、日本語力でもあることがわかる。

さらに、このUnitが終了してから行った小テストでは、throbbing painを「づきづきする痛み」や「ドキドキする痛み」と書いた学生がいた。前者は、ひらがなの使い方が分かっておらず、後者は、ものごとを常識的に考えておかしいと判断する力が身につけていないのであろう。また、「復作用」、「薬の復用」、「看者」など、医療を学ぶ学生として致命的な誤字がみられるのも日常茶飯事である。医療用語に限らず、高校までに学習しているはずの漢字をきちんと書くことができない学生はかなり多い。

## IV. おわりに

これまで、大学のある学科の中位クラスの授業の様子を記述してきたが、医療に関する英語表現のみならず、中学で学習する文法事項や会話表現、正しい日本語の使い方なども時間をかけて教えなければならない状況にあることが容易に理解できるだろう。もちろん上位クラスではここまで丁寧に説明する必要はないが、逆に下位クラスではこれ以上に丁寧にゆっくりと進めていく必要がある。

指導の現場を知らずに、いっこうに英語が話せるようにならないからといって、文部科学省が文法よりもコミュニケーションを重視した結果が今回記述した大学ではこの通りである。さらに、コミュニケーション英語を重視したからといって、今回Can you～?を依頼表現として訳せなかったように、基本的な会話表現も身につけているとは言えず、これらも中学で習う表現からもう一度教えている。もちろんコミュニケーション英語を重視せずに文法ばかり勉強すべきだというわけではない。ただ、いくら英語が話せない日本人が多いからといって、口語表現ばかり学んでも、それだけでは単なるあいさつや天気などといった中身のない話しかできないだろう。身の回りの出来事や専門的な話をしようと思えば語彙力に加え、文法力で正しい文を組み立てて相手に伝える必要がある。そのため、やはり中学・高校の間は必要な文法をきちんと学び、その過程で語彙力や表現力を磨いていく必要がある。

さらには、外国語を操る力は母語を操る力を超えることはないため、日本語力を伸ばすことも必要であろう。日本語の動詞や形容詞がどのようなものであるのかを理解していなければ、英語でも理解できるはずがなく、正しい解釈ができない。そのため小学校から中学校にかけては徹底的に国語の力をつける学びを行うべきである。

数年前には説明せずに済んでいたことも、ここ1、2年では細かく説明しなければ理解してもらえないことが多くなったと身にしみて感じている。学生の学力の低下は一部の大学に限ったことではなく、もはや多くの大学が危機感を持って対処すべき問題になっていることは容易に想像できる。そのため大学の枠を超えて、この問題にどう対応していくのか議論する場があるとよいと思う。一教員としては、これまで以上に学生が理解しやすい授業を続けていかなければならないと考えている。

#### 使用教科書

Medical English Clinic – やさしい医療英語 – センゲージラーニング株式会社

#### 参考文献

- 1) 中條清美・横田賢司・長谷川修治・西垣知佳子 (2012)「リメディアル学習者の英語習熟度と英文法熟達度調査」『日本大学生産工学部研究報告B』 45, 43-54.
- 2) 日臺滋之・松本博文・高橋貞雄・鈴木彩子・小田眞幸・榎本正嗣・丹治めぐみ (2012)「大学入学前の文法の定着度に関する研究」『玉川大学文学部紀要 論叢』 53, 31-58.
- 3) 間中和歌江 (2007)「英語リメディアル授業「大学スタート英語」の実践」『リメディアル教育研究』 2, 49-52.
- 4) 大谷杏・ミューリ真貴子 (2021)「大学生の英語授業と英語学習に関する意識調査」『福知山公立大学研究紀要』 5, 75-87.
- 5) 坂本育生 (2021)「21世紀の国際化時代における新しい英語教育の展望と期待：小学校英語教科化とコミュニケーション重視に対応できる英語教育を目指して」『VERBA (鹿児島独仏文学論集)』 44, 1-9.

2021年12月14日 受理  
了徳寺大学研究紀要 第16号

